



Title	滑石製石釧が提起する諸問題について
Author(s)	上田, 直弥
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 285-294
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

滑石製石釧が提起する諸問題について

上 田 直 弥

はじめに

石製品は古墳時代前・中期において、呪術的役割を果たす道具である。その中の一種である石製模造品は、畿内では特に前期後半から多く用いられるが、その分布は同心円状を呈さず、畿内の他には関東など東日本で盛行するなど、全国的な受容・展開の背景は複雑である（河野 2003）。一方で腕輪形石製品は中期以降になると、農工具形の石製模造品とは対照的にほとんど副葬が認められなくなる。同じ多量副葬というあり方を採りながら、なぜ対象が腕輪形から農工具形へと変化するのか、そこに伴った背景とは何か、議論の余地はまだ残されている。

両者の差は形態の他に石材である。すなわち腕輪形は良質あるいは粗質な緑色凝灰岩で、農工具形は滑石で作られることを特徴とする。一方で、滑石で腕輪形がつくられることはあるが、緑色凝灰岩で農工具がつくられることは基本的にない。この不可逆な関係性の背景や、交替がもつ歴史的意義を考える上では、滑石でつくられた腕輪形製品を検討することが一つの手掛かりとなるであろう。本論ではこの小さな手掛かりから、石製品を用いた古墳祭祀がどのように長期間継続したのか、その祭式の道具立てにおける変化がもつ意味は何かを考えてみたい。

1. 腕輪形滑石製品についての研究史

腕輪形滑石製品の研究史 腕輪形滑石製品の意匠は、通有の緑色凝灰岩製品による製品と共通するものと、特異なデザインのものとの二大別が可能である。特異なものについては三木 1976、杉山 1985 などにおける整理があり、近年にも類例が加わっている（北條 2018）。前者については、中川敬太による集成・分類（中川 2003）、大岡由記子による各形式の分析（大岡 2008）などがある。中川 2003 は昼飯大塚古墳出土例を出発点としつつ、出土資料の整理・再分類をおこなうとともに、製作や副葬のあり方から、農工具形石製品と儀礼用具としての性格が共通していた可能性を指摘し、威信財的性格からの変化が起きつつあったことを推定した。腕輪形滑石製品を総体的に扱った大岡 2008 でも滑石製石釧の分類が行われるとともに、出土・分布状況などを手掛かりとした入手経緯の検討がおこなわれた。車輪石の一部などで中央を介さない流通の可能性が指摘されていたこと（三浦 2005）も踏まえ、必ずしも中央からの配布

に限らない、「首長層間独自の流通網」(p. 207) の存在が想定されている。腕輪形石製品において最も重視された要素が「形」であったために、緑色凝灰岩製品にアクセスできない地域首長が、手近な石材による製品で代替した結果が腕輪形滑石製品の製作要因であるとされた。

石製品全体に対する理解のあり方も度々論じられてきた。中井正幸による「祭器の材質が重要なだけでなく、石製化する「行為」自身が重要視される」(中井 1993:p. 52) という言葉や、「…これら石製品は一連の流れの中においてこそ、その歴史的意味を正確に読みとくことが可能となる」(北條 1999 : p. 3) などの言葉で表わされているように、緑色の石材による製品と滑石製品に関して、従来第一次の分類指標としてあったものを過度に分離すべきではないとの問題提起が早くからなされ、また緑色凝灰岩製品と滑石製品を含めた、「石製祭具(複合)」(北條 1999) としての認識や、前期半ばから出現する滑石製品全体の中での把握が必要であるとの提言(北山 2010) もある。

本稿の課題 さて、滑石製品のうち今回対象とする石釧については、農工具形と軌を一にして出てきた祭具として把握されると同時に、あくまで腕輪形石製品の代替品として散発的な存在意義しか持たないという見方もだされているが、この二つの評価は必ずしも相反するものでは

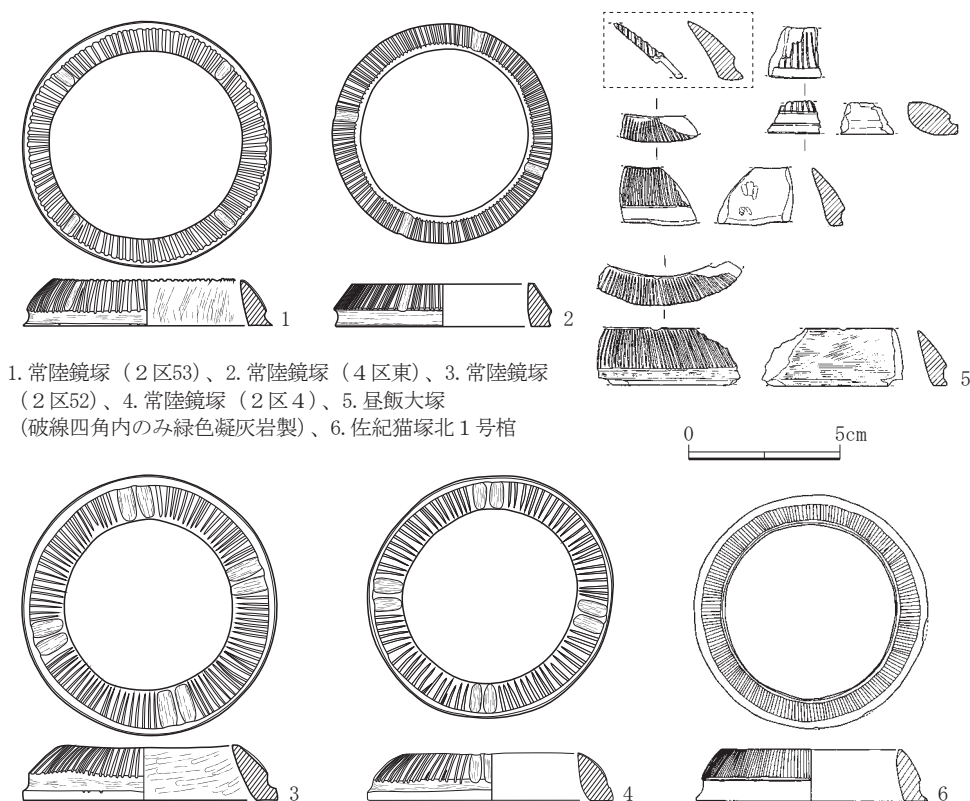


図1 本稿で扱う滑石製・緑色凝灰岩製石釧

ない。すなわち、ともに「配布される威信財」という性格が弱まってきたことと表裏一体の現象として滑石製の腕輪形石製品を評価しており、大岡 2008 でもその後の関東における滑石製品展開につながるものとして述べられている（p. 208）。

しかし、滑石製腕輪製品のあり方には注意すべき点もあると考える。その一つは、緑色凝灰岩製品がしばしば伴うことである。例えば後述の奈良県佐紀猫塚北 1 号墳（棺）では緑色凝灰岩製品と滑石製品の両方による一凹式石釧と、特殊な両面装飾を持つ滑石製品が副葬される。また岐阜県昼飯大塚古墳では、断片的な破片資料のみ出土しているが、滑石製品のほかに緑色凝灰岩製品が含まれることが確実である。昼飯大塚古墳は周知の通り、腕輪形石製品を大量に有する矢道長塚古墳や、時期的に後出し豊富な滑石製品をもつ遊塚古墳に近在しており、かつ両者を墳丘規模で凌駕する。その中で、全国的にも類例の少ない滑石製の腕輪形製品が副葬されている背景として、調達プロセスにおける、緑色凝灰岩製品の単なる不足を想定できるのかは慎重に判断すべきであろう。

本稿では、これまでの研究でも注目されてきた、茨城県大洗町所在の常陸鏡塚古墳（日下ヶ塚古墳）の事例を基軸に、比較対象として昼飯大塚古墳、佐紀猫塚 1 号墳例を加え、特に製品細部の諸特徴に踏み込んで検討することで、この問題の一端に迫りたい（図 1）。

2. 滑石製石釧における意匠差の検討

（1）常陸鏡塚古墳

出土石釧の特徴 常陸鏡塚古墳は茨城県大洗町に所在する墳丘長 101 m の前方後円墳である。同時期の東関東では突出した大型首長墳であり、その内部主体には長大な木棺と粘土槨の組み合わせを採用する。副葬品における最大の特色は、多量かつ精巧な滑石製品の存在である。特に農工具を模した石製模造品は、奈良県富雄丸山古墳と工人レベルでの深い繋がりが指摘されており（清喜 1994）、同時期における関東地域の中でも、特に政権中枢とのつながりが強かったと考えられている。

常陸鏡塚古墳出土の石製品でいま一つ注目できるのは、石製模造品と共通の材質で作られた石釧が複数存在する点である。計 6 点で、型式はすべて一凹式（森下 2005）である。これまではいずれの個体も、緑色凝灰岩製品でも多数派を占める型式として一括的に扱われていたが、意匠の細部をみると個体同士の間に、型式差以上に重視すべき差が存在する。以下、各個体の特徴を確認しておこう（図 2・3）。

鏡塚 A 類（「2 区 53」） 本類の形態的特徴として、①斜面における縦方向沈線の上端が貫通し、石釧上端の外形線が凹凸の激しい状態になっていること、②匙面の下端は石釧本体の下端に近いこと、③環体断面の外側が全体に一連の曲線をなすこと、などがある。このうち①の特徴は



図2 常陸鏡塚古墳各類の様相(1)
(上:A類、中:B類、下:C類)

特に緑色凝灰岩製品との差として強調できるものであり、また③は後述のB類にも共通して、やはり同様に緑色凝灰岩製品との懸隔の大きさを示す意匠上の特徴である。

鏡塚B類 (「2区52」「2区4」) 本類の特徴としては、①縦方向の沈線が石釧上端を貫通せず、石釧本体の上端が滑らかであること、②匙面の下端から石釧下端までの間に面があること、③環体外形が全体に一連の曲線をなすこと等が挙げられる。①の上端様相はA類と異なるが、先にみたように特徴③のほか、特徴②もまた緑色凝灰岩製品との大きな差である。概して、A・B類はともに緑色凝灰岩製品と、意匠の点では大きな差を有すると言することができる。

鏡塚C類 (「4区東」) 本類の特徴は、①上半の斜面がカーブを持たず直線的におりること、②斜面一側面境界部の稜線がシャープであること、③環体頂部に明確な面取りがあること、④匙面下端が他個体に比べせり出さず明確な稜を持つこと、などであり、上記A・B類とは一見して与える印象がかなり異なっている。一つ一つは細かいながらも、複数の要素が全体としてC類をシャープな仕上がりに見せており、その



図3 常陸鏡塚古墳各類の様相(2) (左:A・B類、右:C類)

方向性は緑色凝灰岩製品と共通している。

以上のように、鏡塚古墳例の6点は大きく3グループにわけられる⁽¹⁾。その中でも特に、A・B類に対するC類の距離は大きい。即ち、本グループが明らかに他の4点に対して製作レベルが高く、緑色凝灰岩製品と近い仕上がりなのである。A類の頂部において、顕著な凹凸が処理されずに残っていることも、緑色凝灰岩製品が元々頂部の平坦面を強く意識することに鑑みれば（上田2018）、原品からの距離の大きさを示す点として評価できよう。合わせて穿孔方法と深く関連するとされる環体の内面形状（二村2022）でも両者の差異は大きく、環体の成形手順においても違いがあった可能性が考えられる。

各個体の副葬配置 出土状況についても確認しておこう。副葬時における各個体の配置について見てみると、「2区3」と「2区4」、「2区52」と「2区53」、「4区東」と「4区西」がそれぞれセットで配置されている（図4）。「東」と「西」とが他個体に対して独立的な配置であることは、同一木棺内の被葬者数が複数である可能性（深澤2019）とも関連して興味深い。「2区3」、「2区4」は他の石製模造品と一括で出土し、一方で「2区52」と「2区53」、「東」と「西」はそれぞれ埋葬施設主軸に対して垂直方向に並んだ状態で出土するなど、同じ滑石製石釧の中でもその扱いに差がみられる。

以上、常陸鏡塚古墳例について少し詳しく確認してきた。次にその相対的な意味を考えるために、いくつか比較検討を行ってみよう。ただし資料数全体は多いとは言えないため、今回は関連資料と合わせて複数が出土した有力墳2つを取り上げた。

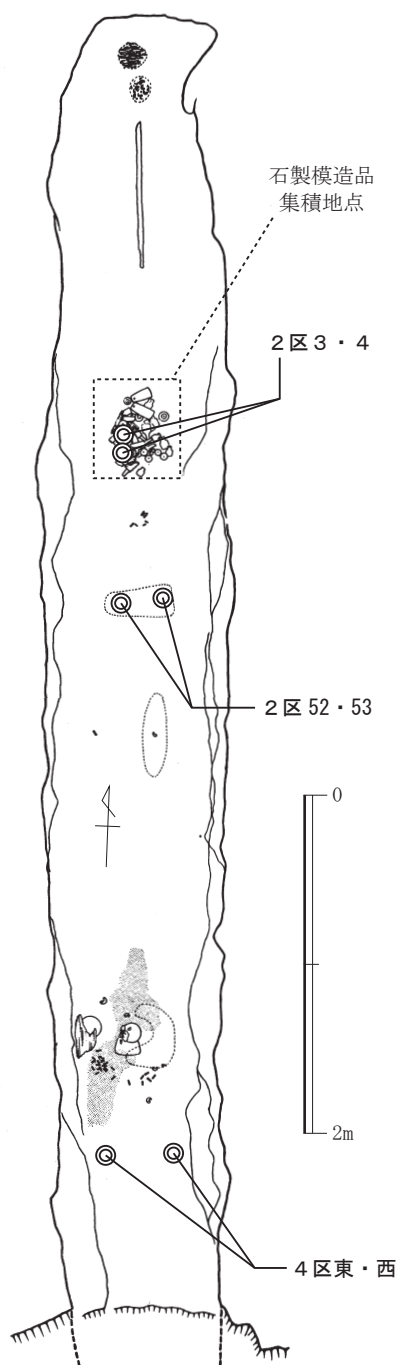


図4 常陸鏡塚古墳における各石釧の出土位置

(2) 関連資料との比較検討

昼飯大塚古墳 昼飯大塚古墳は岐阜県大垣市に所在する墳丘長 150 m の前方後円墳である。同墳出土の滑石製石釧には、斜面の櫛状装飾の密度が通常の緑色凝灰岩製品に比べてかなり密なもの（昼飯A類）と、側面部の下端が突出する特殊な形態のもの（昼飯B類）の二種類が確認でき（図5）、デザイン上の距離は大きい。前者については2点とも、斜面の線刻がまっすぐではなく若干カーブを描きながら施されること、線刻の幅が細く線刻同士の間隔が狭いため非常にピッチの細かい見た目になっていることが特徴であり、一凹式の緑色凝灰岩製品と一見類似するものの、通常の工人が素材のみを違えて製作したものとは想定しづらい。なお両者は内面形状などから別個体であると考えられ、いずれも頂部に平坦面は作り出さない。一方のB類では、緑色凝灰岩製品との差が一層際立つ。線刻は細くスリット状であるが、線刻同士の間隔は広く、かつ線刻間はふっくらと仕上げて陽刻のようにになっているため、A類とは細部仕上げ

の指向性も異なると言える。最大の差異は全体形状に表れており、全体に低平な環体の外面下部に挟り込みを入れることで一凹式「風」の見た目に仕上がっている。形状や彫刻の様相など全体は異なるが、下端部に厚い縁が残ることを気にしていない点などは、先に見た鏡塚のB類製品とも共通し、意匠転写における傾向の一つと捉えうるかもしれない。ただし本墳のA・B類ともに、常陸鏡塚古墳における各例とは明確に意匠が異なっている点は強調しておきたい。



図5 昼飯大塚古墳出土の滑石製石釧各類

(上：A類／報告 No. 4、中：A類／同 No. 3、下：B類／同 No. 2)

さて、昼飯大塚古墳

では上記の滑石製品のほか緑色凝灰岩製品の破片も出土している（図6）。細片で風化も進んでいるが、通有の一凹式であり、境界部における沈線は認められない。斜面部線刻の特徴も上記滑石製品とは一致しない。ただしA類とは、境界沈線を施さないという点、環体の背が高いという点などが共通する。A類については出土した緑色凝灰岩製品と、模倣品とその対象などといった関係にあった可能性もゼロではないだろう。

佐紀猫塚北1号墳 奈良県奈良市に所在する佐紀猫塚北1号墳（棺）は奈良時代に上面が大きく削平されたため、古墳それ自体の情報がほぼ得られていないが、わずかに残存した粘土床の上面および周辺から緑色凝灰岩製車輪石5点、同石釧3点、滑石製石釧3点と多くの石製品が出土した。滑石製品のうち特殊なデザインのものは2点で、通常品は1点のみである（図7）。少量の緑色凝灰岩製品を複数の滑石製品で補うという形になっていないことには注意しておくべきであろう。

さて、本例の型式は一凹式であり、斜面と側面の境界部分にフリーハンドで沈線を施すことや、下端部の突出がやや強いことなどわずかな差はあるが、先に挙げた昼飯A類とかなり近い様相を呈する。具体的には、斜面部において非常に細かいピッチで線刻を施し、その一部がわずかに斜めに傾くという点である。滑石製の石釧全体では製作の一括性を想定し難いが、この2者については比較的強い製作上の繋がりを想定してもよいだろう。

本例は彫刻などの特殊性が比較的薄いため、「流通」の時点から既に通常の緑色石材製品と混在して扱われていた可能性も否定はできない。しかし、例数が決して多くない滑石製の石釧と特殊装飾品が複数伴っている状況を踏まえれば、これを偶然とみるよりも、特殊装飾品と通常品とが非・緑色凝灰岩という点で扱いの上でのつながりを持っていたと考えるべきではないだろうか。本古墳の副葬例については特殊装飾品全体との関係で改めて位置付けを行う必要があると考えるため、ここでは軽く触れるに留めておきたい。

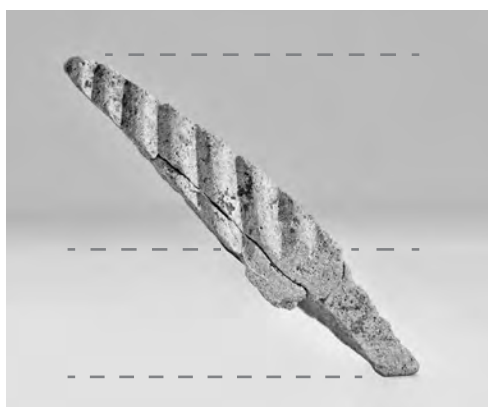


図6 昼飯大塚古墳出土の
緑色凝灰岩製石釧



図7 猫塚北1号墳出土滑石製石釧
（報告 No. K-1）

3. 滑石製石釧がもつ意義

以上に述べてきた各資料の特徴を改めて整理しておこう。まず常陸鏡塚古墳においては同一凹式石釧の中でも巧拙に大きな差があり、緑色凝灰岩製品の製作に関わる工人と、そうではない工人の二者による製作が想定できる。鏡塚古墳は従来の指摘の通り、富雄丸山古墳という石製模造品展開の重要事例と密接な関係を持つが（佐久間 2019）、製品だけが移動してきたのではなく関東での製作が行われた可能性も想定されている（大岡 2008）。そしてその技術移動と同時に、他にない丁寧さをもつ滑石製石釧が製作されていることは、農工具形の展開にあたって腕輪形製作者の関与があったことを強く示唆する。

同型式内での差異が大きいことは昼飯大塚古墳例でも同様で、やはりここでも石製模造品が伴っている。こうした状況から、滑石製石釧製作規範の弛緩が石製模造品の製作と関わって生じている可能性は高いと推測できるだろう。

一方、猫塚北1号墳例では石製模造品は伴わず、代わりに特殊装飾を持つ石釧が共伴する。しかし猫塚北1号墳例は上記の昼飯A類に酷似しているため、やはり本古墳も無関係な存在とは考え難い。そして猫塚北1号墳では複数の緑色凝灰岩製品に1点の滑石製品が伴うという、昼飯大塚古墳とは逆転した様相がみられる。滑石製品の寡少さを踏まえば、これを単に流通上の偶然とみるよりも、特殊装飾品を含めた滑石製品の製作が腕輪形石製品、石製模造品の両方と接点を持っていたゆえの状況とみるべきではなかろうか⁽²⁾。

おわりに

以上、あくまで今回扱ったのはその一部ではあるが、腕輪形石製品と石製模造品との関係をつなぐ存在として滑石製石釧がもつ意義の一端は示せたと思う。最後に、その展開の背景についても触れておきたい。研究史でも述べたように両者は「石製祭具」として捉えるべきとの見方があり、本稿でも両者の製作フェーズにおける密接な関係を想定した。しかしながら、あえてここで強調しておきたいのは、その展開背景における差異である。腕輪形石製品は周知のとおり主に北陸地域で生産されながら、生産拠点付近にはそれらを集積した古墳が見られない。これは軟質の石材により多量の生産がおこなわれるようになっても変わらず、その最大の集積地はやはり畿内など政権中枢部であったと考えられる。一方で石製模造品は、製作が畿内に限られない点では腕輪形製品と共通するものの、製作地である関東などにおいて多く出土し、畿内に無い独自の形式も盛行する。畿内でも大阪府野中古墳や同カトンボ山古墳などで多量の集積は見られるが、政権中枢による独占的管理、言い換えれば製作地での消費の抑制がみられず、

むしろ多様性の点では逆転した状況になっていることに鑑みれば、腕輪形と農工具形、両者に付与されている価値観、担わされた役割には大きな差があったと予想できるのである。両者は相互に関連をもちながら交替的に消長するが、その転換には単なるモデルの変更に留まらない役割の変質があったとみておくべきではないだろうか。一方で相互の連続性をみせつつ、かたやその背後にある展開原理に差をうかがわせる腕輪形石製品と石製模造品は、祭祀の枠組みをデザインする側による意図的な方針転換を反映していると考えられるのである。

謝 辞

本稿の作成にあたっては以下の諸機関、各氏よりご指導、ご協力等を賜りました。記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

大洗町教育委員会、大垣市教育委員会、國學院大學博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、上田健太郎、桐井理揮、高田康成、田口裕貴、蓼沼香未由、平井洸史、深澤太郎、三浦俊明

註

- (1) 諸般の事情により出土品のうち2点は現物を確認できていないが、写真などから判断する限りでは、「4区西」は「4区東」、「2区3」は「2区53」と同じ類に帰属する可能性が高い。
- (2) 近年の発見例として、兵庫県豊岡市耳谷草山24号墳では緑色凝灰岩の凹凸式に特殊な彫刻を施すという、両者の中間的ありかたを呈する例も加わっている（兵庫県まちづくり技術センター2018）。

主要参考文献

- 上田直弥 2018「石釧型式の変遷と生産の画期」『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 385-398
- 大岡由記子 2008「滑石製腕輪形石製品からみた地域間流通」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会、京都：pp. 195-210
- 大場磐雄・佐野大和 1956『常陸鏡塚』国学院大学考古学研究報告第1冊 国学院大学文学部、東京
- 河上邦彦（編）1990『松林苑跡Ⅰ』奈良県橿原考古学研究所、奈良
- 河野一隆 2003「石製模造品の編年と儀礼の展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所、山梨：pp. 15-27
- 北山峰生 2008「出現期滑石製品の位置と古墳編年」『橿原考古学研究所論集』第15 八木書店、東京：pp. 193-214
- 北山峰生 2010「古墳時代前期における石製品の生産動向」『古代学研究』187号 古代学研究会、大阪：pp. 30-37
- 阪口英毅・東方仁史・林 正憲（編）2009『史跡・昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会、岐阜

- 佐久間正明 2019「日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳の石製模造品に関する研究の現状と分析視角」『常陸鏡塚』シンポジウム発表資料集 大洗町教育委員会、茨城：pp. 21-30
- 杉山晋作 1985「特異な彫刻文のある石製腕飾」『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学考古学会創立 35 周年記念考古学論集 早稲田大学出版部、東京：pp. 299-318
- 清喜裕二 1994「古墳出土農工具形石製模造品の研究」『文化財学論集』文化財学論集刊行会、奈良：pp. 713-722
- 中井正幸 1993「古墳出土の石製祭器—滑石製農工具を中心として—」『考古学雑誌』第 79 巻第 2 号 日本考古学会、東京：pp. 159-189
- 中川敬太 2003「5. 昼飯大塚古墳出土の滑石製品」『昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書 第 12 集 大垣市教育委員会、岐阜：pp. 429-438
- 中司照世 2002「腕輪形滑石製品とその同工品」『土筆』7 土筆舎、千葉：pp. 463-472
- 二村真司 2022「石釧の生産と編年」『考古学研究』第 69 巻第 1 号 考古学研究会、岡山：pp. 18-42
- 兵庫県まちづくり技術センター 2018『耳谷草山古墳群現地説明会資料』、兵庫
- 深澤太郎 2019「常陸鏡塚古墳の発掘調査」『常陸鏡塚』シンポジウム発表資料集 大洗町教育委員会、茨城：pp. 1-10
- 北條芳隆 1994「石川条里遺跡と腕輪形石製品」『中部高地の考古学』Ⅳ 長野県考古学会、長野：pp. 235-254
- 北條芳隆 1999「古墳時代前期の石製品研究をめぐって」『考古学ジャーナル』No. 453 ニュー・サイエンス社、東京：pp. 2-5
- 北條芳隆 2018「蒲生野古墳出土石製品について」『京丹波町埋蔵文化財調査報告書』第 1 集 京丹波町教育委員会、京都：pp. 30-32
- 三浦俊明 2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 501-518
- 三木文雄 1976「腕輪形滑石製品考」『江上波夫教授古稀記念論集』考古・美術篇 山川出版社、東京：pp. 51-69

挿図出典

- 図 1：1～4. 筆者実測・トレース 5. 阪口ほか編 2009 6. 河上編 1990
- 図 2・3・5・6・7：筆者撮影、図 4：大場・佐野 1956 をもとに筆者作成